



# HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	イーゴリ遠征譚（訳及び注）（IV）
Author(s)	木村, 彰一; Kimura, Shoichi
Citation	スラヴ研究, 15, 93-101
Issue Date	1971
Doc URL	<a href="https://hdl.handle.net/2115/5006">https://hdl.handle.net/2115/5006</a>
Type	departmental bulletin paper
File Information	KJ00000112930.pdf



## イーゴリ遠征譚

(承 前)

木村彰一 訳

111. そのとき、大君スヴァトスラーフ、黄金の御言、涙もろとも落としたまいて、のたまうよう、
112. 《おお、わが甥たち、イーゴリよ、フセーヴォロトよ、おみたちは、軽がるしくも、つるぎもてポーロヴェツの地を斬りなびけ、おのが名をあげんと志したが、無名のいくさに義しき者の血を流しては、おみたちの勝ちもかえって見ぐるしい。

111. 「そのとき、大君スヴァトスラーフ…」——年代記 Ipatij 本 (1185 年の項; N. K. Gudzij, Xrestomatija, 74-75 による) によれば、キエフの大公 Svjatoslav は Igor' と Vsevolod とが、《自分にかくれて》(утаившеся его) 遠征におもむいたことをきいて、《不愉快に思い》(не любо бысть ему), さらに Igor' たちの敗戦の報に接したときには《長大息して、涙をぬぐい》(вельми воздохнувъ, утеръ слезъ своихъ), つぎのような感想を述べたことになっています: о любя моя братья и сыновъ и мужъ землѣ Рускоѣ! даль ми бяше богъ притомити поганья, но не воздержавше уности, отвориша ворота на Русьскую землю. Воля господня да будетъ о всемъ да како жаль ми бяшеть на Игоря, тако нынѣ жалую болши по Игорѣ братѣ моему. Slovo の作者が Svjatoslav に語らせている《злато слово слезами смѣшено》(参照: 年代記の утеръ слезъ своихъ) は、措辞の違いはともかくとして、Igor' と Vsevolod が無謀な遠征によって彼自身の polovcy に対する再度の勝利 (89 の注参照) のみならず、新たな遠征の企図 (Ipatij 年代記 1185 年の項の次の記事を参照: В то же время великий князь Всеволодичъ Святославъ шель бяшеть в Корачевъ и сбирашеть от вѣрхънихъ земль вой, хотя ити на половци к Донови на все лѣто) をも水泡に帰せしめたことを難ずるとともに、2 人の公の非運を悲しむという趣旨では年代記と軌を一にしています。

Svjatoslav の《злато слово》は 1800 年刊行の editio princeps では 120 で、La Geste では 119 で、また Lixačev では 122 でおわることになっています。В. И. Стеллецкий, Слово о полку Игореве, Москва, 1965 は editio princeps を踏襲し、120 でおわらせることは《в настоящее время твердо установлено》であると述べています (162) が、根拠は不明です。のみならず 120 の「世はさかしま」を、polovcy を攻めるところか逆に攻められることになったという意味に解し、121 はその実例として polovcy による Rim (Rimov) の攻略と、Perejaslavl' 公 Vladimir Glebovič の負傷とをあげていると取るならば、この二つの文の緊密なつながりを断ちきって前半だけを Svjatoslav の言葉とするのはやや穏当を欠くように思われ、その意味でやはり La Geste のように「諸公も予をば助けてくれぬ」(J княже ми неспособность [РА не посobie]) で《злато слово》をおわらせるのが至当でありましょう。これに対し《злато слово》を 122 まで延長しようという Lixačev の考えは、Rim (Rimov) 陥落の責任の一半は Svjatoslav 自身にあるのに (121-122 の注参照)、その彼が Rim (Rimov) 市民の非運に同情するのはおかしいという理由で、やはり穏当でないように思われます。さらにまた、《諸公への呼びかけ》(J 152 まで) の部分をも《злато слово》にふくめようというある研究者たちの考えは、あきらかに誤まりで、これは Lixačev 432, 433 の説いているとおりです。

112. 「おお、わが甥たち」——J о моя сыновчя (А сыновчя). Igor' と Svjatoslav とはいうまでもなく大公 Svjatoslav のいとこにあたりますが、Rjurik 家の hiérarchie から言って当然 Svjatoslav が上位にあるので《甥たち》と呼んだものです。作者は 88 では Svjatoslav を Igor' と Vsevolod との отецъ とすら呼んでいます。

「軽がるしくも」——рано. 年代記の утаившеся его, ないし не воздержавше уности (111 の注参照) に照応するものと考えられます。つまり Igor' と Vsevolod とが Svjatoslav の遠征計画と

113. 《おみたちの雄心は、暴勇の猛火にきたえた、フランクのかたいはがねだ。
114. 《さはあれ、おみたち、しろがねのわが白髪に、なんたることをしてくれたか。》
115. 《いまははや、おとうとのヤロスラーフ、——富強をほこり、大兵をたくわえ、チェルニーゴフの貴族たち、大将たち、またタトラン族、シェルビル族、トプチャク族、レヴグ族、オルベル族を麾下に擁する、かのヤロスラーフも矛をおさめた。楯すら持たず、長靴の胴にひそめたヒ首ひらめかせ、鯨波一声、敵を圧して、父祖のほまれをとどろかせたる武者どものますらおぶりも、いまははや見るによしな

い。

はべつに、また彼の了解をえずに無謀な遠征を企てたことを非難したのです。2人の遠征は、polovcyの軍の主力が北方に移動する夏季を待たずに行なわれた、という点でも無謀だったと Svjatoslav は考えているわけです (La Geste, 124 f.)。

「無名のいくさに義しき者の血を流しては」——J нечестно бо кровь праведную (РА поганую) прольясте (Р пролясте). Liхаѣв, 433 は、нечестно を、Igor' と Vsevolod とが Svjatoslav の許可なしに出征して феодальная честь を無視したことと解し、56の Vsevolod の奮戦を描写するさいの забывь чти (Р чти и, А чти) も同じ意味だと主張しています。これに対し、La Geste 88 f., 123 f. は нечестно を《血を流す》という行為そのものと結びつけ、《異教徒の血を》(кровь поганую) 流すことが当時の道徳的基準から見て《不名誉》(нечестно) とは考えられないからという理由によって、кровь поганую を кровь праведную と訂正することを提案し、さらに «нечестно… кровь праведную прольясте» は Kajaly 河畔の戦闘よりは、むしろそれ以前 (1183) に Igor' が行なった戦闘を指すものと解釈し、その根拠として Ipatij 年代記からつぎのような Igor' の述懐を引いています： много убийство, кровопролитье створишь в земль крестьянстѣй, яко же бо азъ не пощадѣхъ хрестьянъ, но взяхъ на щить городъ Глѣбовъ у Переяславля. (N. K. Gudzij, *op. cit.* 73, 除村訳では478~479, なお кровь праведная [ないし крестьянская] の用例については Sreznevskij, I, 1339, III, 1404を参照)。つまり Igor' はここで1183年に彼が行なった《котора》(Perejaslav' 近郊の Glebov の攻略)を回想し、《キリスト教徒たりとも容赦しなかった》ことを悔んでいるわけです。けれども私見によれば、《異教徒の(ないしは義しき者の)血を流した》、《見ぐるしい勝利をおさめた》(нечестно одолѣсте) という表現を、Kajaly 河畔の戦闘ときり離して考えようとする La Geste の解釈は、112の前段の рано еста начала Половецкую землю мечи цвелити とはどうしてもうまくつながらない憾みがあり、нечестно の意味をどのように取るにせよ、後段はやはり polovcy との戦闘にかかわるものと解釈するほうが自然ではなからうかと思えます。だとすれば、《おみたちの勝ちもかえて見苦しい》(нечестно одолѣсте) は (2度めの戦闘における敗北はもとより、最初の戦闘における)《勝利すら不名誉な勝利であった》という意味に取ることができましよう。ただし поганую < праведную の訂正は、これとは無関係にある程度の probabilité を持ちうるものと考えていいでしょう。

114. 「なんたることをしてくれたか」——112の「軽がるしくも」に対する注参照。

115. 「おとうとのヤロスラーフ」——大公 Svjatoslav Vsevolodovič の兄弟、1180年以来 Černigov 公、1198没。この Jaroslav は1184年 Svjatoslav らの polovcy に対する遠征(89の注参照)に参加せず、翌1185年の Igor' たちの遠征にさいしても、封建的 hiérarchie から言えば Igor' たちの直接の глава であるにもかかわらず、Ol'stin Oleksič を長とする koui (または kovui) (Kiev, Černigov, Galič などの公に随従していたテュルク系遊牧部族)の部隊を送ったにすぎませんでした (Ipatij 年代記1185年の項, N. K. Gudzij, *op. cit.* 71による, 除村訳では474~475)。ヤロスラーフが《戈をおさめた》という表現は、彼が polovcy に対する遠征にこのように消極的であったことを指します。

「タトラン族…」——J Татраны, Шельбиры (А Шельбиры), Топчаки, Ревугы, Ольбѣры (Р Ольберы, А Олбѣры) (いずれも複数造格形) は А. Obrębska-Jabłońska, 134の言うように、族長の称号ないし種族名に由来するテュルク系遊牧部族の名称であると思われまます。

「長靴の…ひらめかせ」——J (=РА) съ засапожники. засапожникъ は長靴の中に入れて持ち歩く短剣のことで、Даль の辞書 (I, 1580) の説明によれば、後世には狩猟用や旅行用に使われたと言います。Koui など東方遊牧部族が長靴を常用し、戦闘にさいしては短剣による白兵戦を得意としたことはよく知られた事実です。

116. 《だがおみたちは言った、余人をまじえず打って出て、きのうのはえをばかっさりい、あすのはえをも分け取ろう、と言ったのだ。
117. 《はらからよ、老いたる者が若やくに不思議があろうか。
118. 《古い鷹も、羽替えののちは、空高く、むら鳥をばうちとって、わが巢を守るというではないか。
119. 《さはあれ、いまは、かなしいかな、諸公も予をばたすけてくれぬ。》
120. 世はすでにさかしまよ。
121. 見よ、リムの衆庶はポーロヴェツのつるぎにうめき、ヴラジーミルはふかでになやむ。

116. 「だがおみたちは言った…」この個所については、Lavrentij 年代記 1186年の項にある次の記事を参照：Того же лѣта задумаша Ольгови внуци на половци, занеже бяху не ходили томъ лѣтѣ со всею князьею, но сами поидоша о собѣ, рекуще: «мы есмы ци не князи же? такы же собѣ хвалы добудемъ». (N. K. Gudzij, *op. cit.* 78による)

「きのうのはえをば…」——J преднюю славу сами похытимъ (P похитимъ), а заднюю ся сами подѣлимъ (P подѣлимъ, A по дѣлимъ). 古代ロシア語の形容詞 прѣдъний, задъний が時にかんして用いられる場合の解釈は、かならずしも一致せず、たとえば Sreznevskij は прѣдъний に対しては прежний, будущий (?) の二つの訳語を与え (II, 1642~43), задъний に対しては順序を逆にして будущий, прежний の二つの訳語を与えています (I, 910)。Slovo の J 116にかんして言えば、La Geste の著者たちは преднюю славу を《未来のはまれ》, заднюю [славу] を《過去の[はまれ]》と解しており (たとえば Jakobson のロシア語訳 «грядущую славу сами добудем и прежнюю сами поделимся», La Geste, 193), A. Obrębska-Jabłońska, 153; T. Čiževska, Glossary of the Igor' Tale, The Hague, 1966, p. 281, p. 152; Sreznevskij, *loc. cit.* などと同様です。これに対し、Lihačev, 91は преднюю славу を прошлую славу [славу предшествующего похода соединенных русских сил под главенством Святослава Киевского], заднюю を будущую [славу своего собственного похода] と取っており、拙訳はかりにこの解釈によりました。Lihačev のこのような解釈の根拠になっているのは、彼自身が «Из наблюдений над лексикой “Слова о полку Игореве,” Изв. АН СССР, ОЛЯ, т. VIII, вып. 6, 1949, стр. 552~554 で示している興味ある見解で、それによれば、прѣдъний は時にかんしては《過去》を、より正確には《一定期間のはじまり》(начало какого-то определенного промежутка времени) を、これに対して задъний は《最近起こったこと》, 《一連の諸事件の完結》(завершение какой-то цепи событий), ときには《未来》をも指す、ということになります。なお В. П. Адрианова-Перетц, «Фразеология и лексика “Слова о полку Игореве,” Слово о полку Игореве и памятники Куликовского цикла, изд. «Наука», 1966, стр. 88~89 をも参照。

118. 「古い鷹も…」——この個所にかんしては、Повесть об Акире の17世紀末ごろの写本の一つに見られる次のような書き入れを参照：Егда бо сокол трех мытей бывает, он не даст ся с гнезда своего взяти (В. П. Адрианова-Перетц, *op. cit.*, 90による)。

120. 「世はすでにさかしまよ」——J На ниче (A наниче) ся години обратиша! (РА.) Polovcy に対する勝利がえられず、反対に彼らの攻撃から Rus' を守らねばならなくなったことを指します (121-122 に対する注参照)。

121-122. Ipatij 年代記 (N. K. Gudzij, *op. cit.*, 75-76, 除村訳では 482-483) によれば、Igor' たちに対する勝利ののち、polovcy は《大いなる誇りを抱き》(взяша гордость велику), 二手にわかれて Rus' の地に対する反撃に転じました。Гза 汗のひきいる一隊は Putivl' をかこみましたが、これを攻略することができず、その《外郭》(острогъ) を焼きはらい、領地を荒して引き上げました。他方、Končak のひきいる一隊は Perejaslavl' に兵をすすめて町をかこんだのに対し、Perejaslavl' の公 Vladimir Glebovič が、来援した Kiev の公 Svjatoslav および Rjurik Rostislavič とともに勇敢に防戦して、彼らを撃退しました。その後 polovcy は Rim (または Rimov) をかこみ、このたびは Vladimir の要請にもかかわらず Svjatoslav と Rjurik とが救援を躊躇したためについにこの町を攻

122. ああ、さちうすきグレープの子！
123. 大いなる君、フセーヴォロト！ 黄金なす父祖のみくらをまもらんがため、はるけき国よりかけり来んと、心を君は持ちたまわぬか？
124. 君はあまたのつわもの共の權もてヴォルガをしぶかせたまい、かぶともてドンの水さえ乾したまう。

略し、多くの捕虜をとらえておのれのもとへ帰りました。なお Vladimir Glebovič は Perejaslavl' 攻防戦のさい奮戦して重傷を負いましたが、そのときの模様は Ipatij 年代記に次のように描かれています： Володимеръ же Глебовичъ бяше князь в Переяславль … выѣха из города и потче к нимъ, и по немь мало дерзнуть дружинѣ, и бися с ними крѣпко; … тогда прочии, видивше князя своего крѣпко бьющяся, выринушася из города, и тако отъяша князя своего, язвена суши тремя копыи. Сий же добрый Володимеръ язвен трудень выѣха во городъ свой и утре мужественаго поту своего за отчину свою … なお Vladimir は 1187年 4月18日病死していますが、病いの原因はこの時受けた重傷にあったと想像されます。

「見よ、リムの衆庶は…うめき」——J Се у Римъ (Cantare による; Р Уримъ, А урим) кричат。この町は、Dnepr の左の支流で、zemlja Russkaja と zemlja Poloveckaja との境をなす Sula 河 (18 の注参照) にのぞむ町で、\*Римъ とともに Римовъ と呼ばれていたらしく思われます。年代記の用例は、たとえば Lavrentij 年代記1096年の項 (Vladimir Monomax の «Poučenie») : И идохом на вои ихъ [rolovcy の] за Римовъ, и богъ ны поможе…(Повесть временных лет, под ред. В. П. Адриановой-Перетц, Изд. АН СССР, 1950, ч. 1, стр. 161); Ipatij 本年代記1185年の項: Половци же вземше городъ Римовъ …; … идущи же мимо, приступиша к Римови (<\*Римъ) …; なお次の例も参照: Римовичи же затворишася в городѣ …; бяхуться, ходяще по Римскому (<\*Римъ) болоту (N. K. Gudzij, *op. cit.*, 76), J у Римъ (Lixačev, 21も同じ) の Римъ は複数 \*Рими の生格と解されるわけですが、\*Римъ, Римовъ のほかに \*Рими という形があったかどうかははなはだ疑わしいと言わざるを得ず、だとすればむしろ Р Уримъ を у Римъ と読んで、у は въ の方言形と解するほうが、probabilité はより大きいかもしれません。なお Lixačev, 91は у Римова と訳し、T. Čiževska, *op. cit.*, 397に見える Jakobson による再構テキストでは въ Римъ となっています。

123. 「大いなる君、フセーヴォロト！」——J (=PA) Великий княже Всеволоде! この Vsevolod は Suzdal' の Vladimir の公 Vsevolod Jur'evič (在位 1177-1212) を指します。Vladimir Monomax の孫, Jurij Dolgorukij の子に当たり、《Большое Гнездо》のあだ名で知られるこの公は、Slovo の書かれた当時 Monomaxoviči 中もっとも強力な公で、作者が諸公に対するアピールの最初にこの公をもってきた理由もそこにあります。

「父祖のみくらを守らんがため」——J (=AP) отня злата стола поблюсти. Vsevolod の祖父 Vladimir Monomax も、また父 Jurij Dolgorukij も、Kiev に大公として君臨したことがあり、ことに後者は3度にわたって Kiev を攻め、1155年ついに宿望を達して大公となり、2年後の1157年 Kiev に歿しています。これに反し、彼の息子である Andrej Bogoljubskij および Vsevolod は Kiev に関心がなく、むしろ自分たちの住地である北東 Rus', Kljaz'ma 河畔の Vladimir-Zalesskij を Kive にかわる Rus' の中心にしようとして、ことに Vsevolod に至っては Vladimir の公としてはじめて《大公》(Velikij knjaz') と称しました。Slovo の作者が《父祖のみくらを守らんがため》《はるけき国より》(издалеча) かけつけてもらいたいと言っているのはこれらの事実と正確に照応します。

124. 「君はあまたの…」——J Ты бо можеши Волгу веслы роскропити (Р раскропити), а Донъ шеломы выльяти. 《Volga の水を櫂でしぶかせる》ことも、《Don の水をかぶとで掻い出す》ことも、Vsevolod が強大な軍勢を擁していたことの hyperbolique な描写ですが、《Volga の水》うんぬんは、同時にまた、1184年 (La Geste, 126による; В. Н. Татищев, История Российская. Изд. «Наука», 1964, т. IV, стр. 298 も同じ; ただし Lixačev, 437によれば1183年, Ipatij 本年代記によれば1182年, 除村訳, 473-474参照) における Vsevolod の Volga および Kama 沿岸の bolgary に対する遠征を暗示しています。この遠征で、Vsevolod 軍は敵を Volga に追いつめ、彼らが乗った《平底舟》(учаны) をくつがえし、1000人以上を溺れさせました。なお《Don の水をかぶとで掻い出す》という表現については、13 《わがかぶとに汲んで、ドンの水をのみはす》(испити шеломомъ Дону), 89 《早瀬、沼地をことごとく乾し》(иссуши потоки [Р потоки] и болота) を参照。

125. 君もしここにいたりたまわば、女どれいは1ノガタ、男どれいは1レザナにて、市をうるおし得たものを。
126. いさましきグレープの子らを、いのちある火箭さながらに、陸路にも放ちたまはるおんみのみ。
127. またおんみ、たけきリューリク、またダヴィト。黄金のかぶとひたしつつ、血潮

125. 「君もしここに…」この文の意味は、もし Vsevolod がその強大な軍勢をひきいて polovcy との戦闘に参加したなら、大勝をばくして、どれいの価格が一挙に暴落するほど多数の捕虜を得たであろう、ということに帰着します。Nogata は古代ロシアの貨幣単位 grivna の 1/20, rězana は 1/50 にあたりますが、Russkaja Pravda によるどれい一人の平均的な価格は 5 grivna, すなわち 100 nogata, ないし 250 rězana ですから、女のどれいが 1 nogata, 男のどれいが 1 rězana というのは fantastique な安値になるわけです。

126. 「いさましきグレープの子ら」——J (=PA) удалыми сыны Глѣбовы. Jaroslav Svjatoslavič の孫にあたる Gleb Rostislavič の 4 人の子, Roman, Igor', Vsevolod, Vladimir のこと。この 4 人はいずれも Rjazan' の公でしたが、1180年互いに相争ったのを Vsevolod が仲裁して以来、彼のいわば《家の子》となり、1184年 Kama の bolgary に対する遠征にも参加しました。(124の注参照; La Geste, 127による)。

「いのちある火箭さながらに、陸路をも」——J по суху (P посуху) живыми (A om) шерешеры. K. H. Menges, *op. cit.*, 70によれば, шерешерь (harax!) は “without doubt the most problematic word of the Slovo” だが、意味は明瞭で、要するに “a shooting arm, a kind of catapult shooting heavy projectiles, and, as it seems, projectiles charged with Grecian fire” を指すものと解され、T. Čiževska, *op. cit.*, 383の引いている B. D. Grekov, A. Ju. Jakubinskij の説もほぼ同様。ちなみに Lavrentij 年代記6449 (=941) 年の, Igor' のギリシア遠征をのべた個所に《Феофанъ же сустрете я въ лядехъ со огнемъ, и пушати нача трубами огонь на лодьѣ руския》(Пов. вр. лет. Изд. АН СССР, 1950, стр. 33; 除村訳では32)とありますが、この火を放つ《管》(труба)もあるいは同じものを意味しているかもしれません。ところでこの武器は polovcy も知っていたようで、そのことは Ipatij 年代記1184年の項にある《Кончакъ … бѣше бо обрѣлъ мужа такового бесурменина, иже стрѣляше живымъ огньмъ》(T. Čiževska, *loc. cit.* による)という記事があきらかに示しています。Ipatij 年代記はまた, Končak がこの新兵器を用いて Rus' の諸都市を焼きはらう意図を持っていたこと、この《бесурменинъ》がその武器とともにロシア軍に捕えられたことを報じており、だとすればこのことが Slovo の作者の念頭にもあったろうことは、M. Szeftel が推測するように (La Geste, 127) 大いにあり有ることと言わねばなりません (年代記の живымъ огньмъ と Slovo の живыми шерешеры の類似に注意)。いずれにせよ作者は、1184年の bolgary との戦闘で Vsevolod の陸上部隊に参加していた Gleb の子らを живой огонь にたとえ、しかもこの武器ががんらい水上の戦いに使われていた (上掲 Lavrentij 年代記の記事参照) ゆえに、とくに《陸路をも》(по суху) と言ったわけです。

127. 「たけきリューリク、またダヴィト」——Rjurik と Davyd とは、ともに Smolensk の公 Rostislav の子, Vladimir Monomax の曾孫、とくに Rjurik (1215 歿) は12世紀を通じてもっとも著名な公の一人で, polovcy と、Rus' の諸公とも頻りに戦いをまじえ、Kiev を攻めること7回、とくに1203年 polovcy とともに Kiev を攻略したさいはこの都市に史上空前ともいうべき打撃を与えたといわれています。Igor' の遠征の行なわれた当時は、Kiev の西40キロの所にある Belgorod にあって、Kiev をのぞく周辺地域一帯に勢威をふるい、わずかに Kiev 市のみを領有する大公 Svjatoslav をも意のままに動かしていました (88に対する注参照)。したがって Slovo の作者が、北東ロシア Vladimir-Zalesskij の《大公》Vsevolod Jur'evič に次いで、この公に Igor' の救援を訴えているのはきわめて当然とすることができます。なお文化的な事業 (年代記編さん、教会の建立など) に対するこの公の貢献については Lixačev, 438 を参照。他方彼の兄弟 Davyd (1197 歿) は1180年以来強大を誇った Smolensk の公であり、またしばしば Rjurik の行なった遠征に参加しています。さらにまた、121-122の注で述べたように、Igor' の敗戦後、Končak の軍が Perejaslavl' に迫ったとき、Rjurik は Vladimir Glebovič の要請に応じて Svjatoslav とともに Perejaslavl' の防衛に参加しましたが、Davyd は要請にこたえず、また Končak 軍が Rim (Rimov) をかこんだときも、Svjatoslav と Rjurik が救

の海を渡ったは、おみたちのつわもの共であったはず。

128. 利きつるぎ身に受けて、手負いとなった野牛のごとく、名も知らぬひろ野にほゆるも、おみたちのたけき従士ら。
129. いざや、君たち、乗りたまえ、黄金のあぶみに。いまの世の恥すすがため、ロシアの国をば守らんため、スヴァトスラーフの雄々しき子、かのイーゴリが手傷のため。
130. ガリーチの、八念の君、ヤロスラーフ。黄金づくりのみくらの上に、おんみは高

援におもむくことを躊躇したのは Davyd が来援に応じなかったためでした。Slovo の作者が Rjurik の名とならべて Davyd の名をもあげているのは、このようなさまざまな事実を考慮した上でのことであると思われます。

「黄金のかぶとをひたしつ…」——Lixačev, 439, および A. Obrębska-Jabłońska, 136は、この個所に、Rjurik と Davyd がともに参加した、Erel' 河畔 (Dnepr の左の支流) における Rus' 諸公の polovcy に対する勝利 (1183; 89に対する注参照) への allusion を見ようとしています。なお「おみたちのつわもの共であったはず」の原文は J (=PA) не ваю ли…? ですが、Lixačev, A. Obrębska-Jabłońska は、V. N. Peretc にならって、この ли のあとに вои を挿入、La Geste, 89 や Jakobson の1964年の再構テキスト (T. Čiževska, *op. cit.*, 397) もこの挿入を可能性としてみとめています。

128. 「利きつるぎ身に受けて…」——この個所は、La Geste, 128, および A. Obrębska-Jabłońska, 136-137が説くように 1177年、Rjurik と Davyd とが、Rostovec (Dnepr の西) で polovcy と戦い、Igor' のそれにも比すべき大敗を喫した事件 (Ipatij 年代記1177年の項) に対する allusion であると考えられます。Rostislav の2人の子たる彼らが単独で戦い、これが敗戦の原因となったことも、Svjatoslav の2人の子 Igor' と Vsevolod との遠征の場合によく似ています。だとすれば、129の《いまの世の恥すすががため》J (=PA) за обиду сего времени という一句における《いまの世の恥》とは《1177年の恥》に対比された《1185年における Igor' と Vsevolod の敗北の恥》を意味するものと取ることができましょう。こう考えますと《ロシアの国をば守らんため》за землю Рускую, 《イーゴリが手傷のため》за раны Игоревы という refrain が、129, 132 (Galič の Jaroslav へのアピール), 142 (Mstislav の子らへのアピール) の3個所にくり返されているのに、同じ構文の за обиду сего времени が129にしか出て来ないこともまた、Rostislav の二人の子らにだけはとくに 1177年の彼らの敗戦を思い出させようとする作者の用意のあらわれと解することができるのではありますまいか。

「名も知らぬひろ野に」——J (=PA) на полъ незнаемъ. «Поле незнаемо» (67にもあり), ないし «земля незнаема» (29) は Половецкая степь の (地理的にはしかと定めがたい) «эмоциональное определение» (Lixačev, 394, 439) です。

129. 「かのイーゴリが手傷のため」(原文は128の注参照) ——Ipatij 年代記 (N. K. Gudzij, *op. cit.*, 73, 除村訳では477) によれば、Igor' は polovcy との2度めの戦闘で左手に傷を負っていますが、この《手傷》(раны) は беда ないし поражение の意味ととるべきでしょう (Sreznevskij, III, 69 参照)。

130. 「ガリーチの、八念の君、ヤロスラーフ。」——J Галичкы Осмомыслъ (А Осмомысле) Ярослав! (P om). Jaroslav は Vladimirko の子、1153年から1187年に没するまで、富強を誇る南西の辺境 Galič の公位にあったきわめて有力な公で、Igor' の妻 Evfrosin'ja (Jaroslavna) はその娘にあたります。この公のあだな Осмомыслъ (hapaх!) の意味については古くからさまざまな説があって、にわかには断定はできませんが、もっとも probabilité に富むと思われるのは La Geste (129, 306-307) の所説で、A. Obrębska-Jabłońska, 137 もこれに従っています。それによれば、V. N. Tatiščev (III, 280-281) が引いている (いまは失われた) “Instruction de Yaroslav” とも称すべき記録に、Jaroslav の生涯を通じての関心事であった事項 (たとえば万人への奉仕、困窮者への援助など) が8つ列挙されており、これによって Slovo の作者ないし Jaroslav の側近者が彼を Осмомыслъ と名付けた、という推測が成り立ちます。さらに上記 “Instruction” は、Evagre le Pontigue (4世紀) の述作 “Peri tōn oktō logismōn” のスラヴ語訳 “Slovo Evagrija mnixa ko osmi mysli” の paraphrase と考えられる、と La Geste の著者たちは考えています。なお、これらは La Geste の著者たちの創見ではなく、“Instruction” との rapprochement は皮肉なことに Slovo 偽作説を唱道した

く座したまう。くろがねの精兵もて、ハンガリーの山をばささえ、王のゆくてをさえぎりとどめ、ドナウの河の門をばとざし、雲のかなたに石をばはなち、遠くドナウのほとりにまで、さばきの庭を進めたまう。

131. 諸国あまねくみいつをふるい、キエフの門をば押しひらき、みおやの黄金のみくらより、遠国の異教の王に矢射かけたまう。

A. Mazon (*Le Slovo d'Igor*, Paris, 1940, p. 153) の、また “Slovo Evagrija mnixa” との rapprochement は P. Bulyčev の考え (1922) です。

「高く座したまう」——J (=PA) *высоко съдиши*. 当時 Galič の町が高い丘の上にあったことは考古学的な研究から明らかにされており、したがって Slovo の《高く》という表現はきわめて具体的です。Lixačev, 440-441 を参照。

「ハンガリーの山」——J *горы Угорьскыи* (P *Угорьскыи, А Угорь скыи*). 当時の Galič 公国とハンガリーの境にあったカルパット山脈 (Karpaty) を指します。

「王のゆくてをさえぎりとどめ」——《王》(король) はハンガリー王のこと。

「ドナウの河に門をばとざし」——J *затворивъ* (P *затвори въ*) *Дунаю ворота*. La Geste, 128は、この句の意味を Jaroslav が Donau 下流沿岸の町々や Seret, Prut の二つの支流を自己の勢力下におくことによって、Donau 河による通商の死命を制した、というふうにとっており、A. Obreńska-Jabłońska, 137 や V. I. Stelleckij, *op. cit.*, 172 もほぼ同様の解釈を取っていますが、*затворити ворота* は与格とともに《…に抵抗する》意味であることは Lixačev, 442 や V. P. Adrianova-Peretc, *op. cit.*, 94 の説くとおりで、ここは《Donau に対して (おのれの領地の) 門をとじる》、《Donau 方面からの敵の攻撃にそなえる》、《Donau の守りをかためる》という意味に解すべきでしょう。(このことが、Jaroslav が Donau 下流沿岸を勢力下におさめていたという史実と矛盾するものでないことは言うまでもありません。) なお 142 J (=PA) *Загородите полю ворота* も同じ構文で、《ステップ (の polovcy) に対して門をとじよ》、《ステップ (の polovcy) からの攻撃にそなえよ》という意味になるはずで

「雲のかなたに石をばはなち」——J *меча камены* (PA *времены*) *чрезъ облакы* (P *облаки*). PA とともに *времены* となっていますが、P のロシア語訳には *тягости* とあり、これによって多くの研究者 (たとえば Lixačev, 422) は *времены* を *бремены* と訂正しています。La Geste が *времены* を *камены* とした理由は、*метати камены* のほうがより普通の言い方である上に、*меча времены* は *метати камены* と *врещи камены* の contamination と見なすことができるから、という点にあります (89)。*времены* の読み方を別としても、この個所の解釈は古来一様でなく、たとえば Lixačev, 93 は Jaroslav がしばしば遠い国ぐに遠征軍を派遣したことを指すと解し、V. I. Stelleckij, *op. cit.*, 172-173 は隊商たちが Karpaty をこえてハンガリーとの間を往復したことを指すと解していますが、私見によれば *метати камены* (ないし *бремены*) は、La Geste, 129 や A. Obreńska-Jabłońska, 137 の説くように投石器 (catapulte) によって敵に石を放つことを意味しているに相違なく、また *меча камены чрезъ облакы* はすぐ次につづく J (=PA) *суды рядя до Дуная* とまったく同じ構文である点から見て *чрезъ облакы* は《Карпаты をこえて》の意味と思われ、したがってこの個所は《強力な投石器部隊を派遣してハンガリーを制圧する》意味にとるべきでありましょう。

「遠くドナウの…進めたまう」(原文は上を参照)——Lixačev, 443 の説くように、《ドナウ沿岸の諸地方にまで権力をふるう》意味と思われま

131. 「キエフの門をば押しひらき」——J *отворяеши* (P *отворяеши*) *Кіеву врата*. 《門をひらく》という表現は市民みずからがひらく場合には《降伏する》、敵がひらく場合には《征服する》意味になります (Lixačev, 442, 443 参照)。ここではもちろん後者の場合で、しかも比喩的に Jaroslav が Kiev をめぐる諸公の内紛にしばしば武力を用いて干渉した事実を指すものと思われま

「遠国の異教の王に…射かけたまう」——J *стрѣляеши* (A *стреляеши*) *салъгани* (P *Салгани*) *за землями*. G. Vernadsky (La Geste, 228-229) によれば、この *салъгани* は Igor' の遠征当時におけるセルジュク・トルコの sultan, Izeddin Kilidge Arslan III (在位 1156-1192) のことで、*салъгани* と複数になっているのは、名前が3つあるために Jaroslav の informateur または Slovo の作者によって3人と誤り解されたものと考え、ビザンツと緊密な関係にあった Jaroslav がビザンツとセルジュク・トルコとの戦いにさいしその投石器部隊を小アジアに派してビザンツを援けたのは、“tout à fait probable” であると言っています。

132. いでや君, 射たまえや, コンチャーク, 邪教のやっこを, ロシアの国をば守らんため, スヴァトスラーフの雄々しき子, かのイーゴリが手傷のため。!
133. またおんみ, 雄々しきロマン, はたおんみ, ムスチスラーフ。! たけき思いはひとすじに, おみたちの心をいさおへ駆りたてる。
134. 餌食の鳥をしとめんものと, ひたすらに風に乗じてあまがける鷹さながらに, いさををのぞんで, たけりつつ, 空高く舞い上るおんみロマン。
135. おみたちのラテンの兜, その下の鉄の胸あて, その甲冑に, 大地はふるい, フランクの剛刀のもと, ハンガリー, リトワニア, ヤトヴァーギ, デレメーラ, ポーロヴェツなど, あまたある国ぐには, 槍をすて, こうべを垂れた。
136. さはあれ, わが君, いまははや, 日はイーゴリにおもてをかくし, 木は不吉にも葉

132. 「いでや君, 射たまえや…」—J Стрѣляй (А Стреляй), (РА om) господине, (РА om) Кончака. Lixačev, 144 は, Rjurik と Davyd に対する呼びかけでは《乗りたまえ, 黄金のあぶみに》(J 129, Вступита … въ злата стрепен(и) [РА стремянь]) とあるに対し, Jaroslav への呼びかけには《射たまえや》(стрѣляй) とあること, つまり前者には直接遠征に加わることを, 後者には軍隊を派遣することのみを求めていることに注意し, これは Jaroslav がもっぱら内政に意を用い遠征軍とともに外地へおもむくことがなかったからだと言っています(«сам не ходяшетъ полкы своими … бе бо ростроил землю свою», Ipatij 年代記, 1187年の項)。

133. 「雄々しきロマン」—J (=РА) А ты буй Романе. Roman は Vladimir-Volynskij の公 (1205歿), Vladimir Monomax の曾孫 Mstislav Izjaslavič の子で, みずからの領地と境を接するポーランド人やリトワニア人, さらに polovcy ともしばしば戦い, 西ヨーロッパにもその名を知られていたことは Lixačev, 444-445 の詳説するとおりです。なお 127 に名の出ている Rjurik Rostislavič は彼の父 Mstislav のいとこに当たりますが, 彼はこの Rjurik の娘を妻にしていました。

「はたおんみ, ムスチスラーフ。!」—J (=РА) И Мстиславе! この Mstislav は Roman のいとこに当たりしばしば彼の遠征に参加した Mstislav Jaroslavič Peresopnickij (1224歿, Peresopnica は Vladimir-Volynskij に近い Volyn' の町) を指すもののようで (La Geste, 130; V. I. Stelleckij, *op. cit.*, 175; Lixačev, 445 は否定的), だとすれば J 140 に出る Ingvar' と Vsevolod はこの人物の兄弟ということになります。

135. 「ラテンの兜」—J подъ шелома Латиньскими (Р латинскими, А Латынь скыми). Roman の領国 Volyn' はポーランドに境を接していただけに, 彼の戦士たちは西ヨーロッパふうの甲冑を使用していたものと思われま。

「鉄の胸あて」—J желѣзнии (Р желѣзнии) паперси (РА папорзи). La Geste, 90 は Buslaev, Peretc らにならって РА папорзи を паперси に訂正し, Georgios Hamartolos の年代記に見える (Sreznevskij, II, 1204 参照) поперсьци (=ギリシア語 *lōroi* “breastplate”) と同一視しています (V. I. Stelleckij, *op. cit.*, 176 も同様)。La Geste, 130 の説くように, これまたロシアや東方のくさりかたびらに対する西欧伝来の武具で, 《ラテンの兜》とも, また下の《フランクの剛刀のもと》J (=РА) подъ тьи мечи харалужнии (これについては 53 の注参照) とよくマッチするわけです。これに対して Lixačev, 466; A. Obreńska-Jabłońska, 137-138 は папорзи を Orlov にならって паропци ないし паробии (=юноши, молодцы) に訂正することを提案していますが, 前者の説のほうが *contexte* から言ってより穏当と思われま。

「ハンガリー, リトワニア, ヤトヴァーギ, デレメーラ, ポーロヴェツ」—J Хинова, (Р.) Литва, Ятвязи, Деремела (Р, А;) и Половци. いずれも Roman が遠征した Rus' 周辺の民族の名で, хынь (複 хынове) については 105 の注参照; ятвяг (複 ятвязи) は Bug の下流, およびその支流 Narew 沿岸にいた Balt 族の一つ (La Geste, 130-131; M. Vasmer, *Russ. etym. Wb.*, III., 498 参照); деремела はおそらく東部プロイセンにいた Balt 族の一つ (La Geste, 131; M. Vasmer, *op. cit.*, I, 342 参照) を指します。

136. 「さはあれ, わが君, いまははや, 日はイーゴリにおもてをかくし」—J Нъ уже, (РА om) княже, (РА om) Игорю (РА,) утрѣпѣ (Р утрпѣ) с(о)лн(е)ц(ь) (РА солнцю) свѣтъ. РА

をおとした。

137. ローシとスラーの岸べあまねく、敵はあまたの町をわけとり、イーゴリの雄々しき勢を、よみがえらせるすべはない。
138. わが君よ、ききたまえ、ドンの叫びを、君たちを勝ちへとまねくかの呼び声を。
139. オレークをみおやとおおぐいさましき君たちは、はや勢揃えととのつたるに。

〔附記〕 本稿は昭和45年度文部省科学研究費による研究成果の一部である。

は княже Игорю と読んで Igor' に対するよびかけと取っていますが、そうすると 138 の《わが君よ》 J (=PA) княже もやはり Igor' と取らざるをえず、その間にはさまっている 137 の《イーゴリの雄々しき勢を、よみがえらせるすべはない》 J а Игорева храбраго плъку (А полку) не крѣсити (А некресити) という 3 人称の文の解釈がつかなくなってしまう。そこで La Geste は княже と Игорю との間にコンマをおいて、княже を単数呼格、Игорю を単数与格ととり、《だが、すでに、(Roman) 公よ、Igor' にとって日の光は消えた》という意味に解するわけです。La Geste, 90 が、РА солнцю を с(о)лн(е)ц(ь) に訂正しているのは元来の сълньчъ (形容詞男性単数主格。Slovo における ц と ч の混同については La Geste, 9 を参照) が略字で書かれていたために copiste によって солнцю (名詞単数与格) と誤り書かれたものという推定にもとづいています。ただし V. I. Stel'leckij, *op. cit.*, 91 のように солнцю を生格のかわりに用いられた与格ととって «солнца свет» と訳する可能性も考えられないわけではないと思います。なお Lixačev, 94 は、Roman と Mstislav への呼びかけが J 135 で中断されたものと考え、J 136-139 全体を諸公への呼びかけの中に挿入された作者の Igor' 敗戦にかんする感慨の表白と見、また J 136 の問題の一句にかんしては、РА の punctuation と солнцю とを生かして、Но уже, о князь Игорьъ, померк солнца свет と訳していますが、いずれもきわめて不自然な解釈で、到底従うことができません。

137. 「ローシ」—Ros' は Dnepr の右の支流で、やや下流にある Sula (Dnepr の左の支流) とともに земля Половецкая に対する防衛線を形成していました。

「イーゴリの雄々しき勢を…」—J а Игорева храбраго плъку (А полку) не крѣсити (А некрѣсити). 80 とまったく同じです。この表現は年代記にも例があり (たとえば Рече же имъ Ольга: „Люба ми есть рѣчь ваша, уже мнѣ мужа своего не крѣсити…“ [Повссть временных лет, *op. cit.*, 40-41, 除村訳では 37]), 一種の formule と考えられます。

138. 「わが君よ、ききたまえ…」—J Донъ ти, (РА ом) княже, (РА ом) кличь (Р кличь / РА,) и зоветь (А зоветь) князи на побѣду (А напобѣду). Lixačev, 94 はこの一文を Igor' 自身の言葉と解し、引用符でかこんで „Дон тебя, князь [Игорь], кличет и зовет князей на победу!“ と訳し、その前に [Помнишь, князь Игорьъ, что ты говорил:] を補っています。このように無理な解釈を取らざるをえなかったのはおそらく J 136 を Igor' に対する呼びかけと解したからでしょうが、いずれにしても到底従うことのできない解釈です。

139. 「オレークをみおやとおおぐいさましき君たちは、はや勢揃えととのつたるに」—J Олгови-чи, (РА ом) храбрыи князи, (РА ом) dospъли на брань. この Ol'goviči は当然 Potel'nja にしたがって Oleg («Gorislavič», J 94 参照) の子孫たる Svjatoslav 大公、その二人の息子 Oleg と Vladimir, その兄弟 Černigov の Jaroslav など指すものと解すべきです。Ipatij 年代記 *op. cit.*, 75 (除村訳では 480, 481) に、Igor' の敗北後、… Святославъ посла сына своего Олга и Володимера в Посемье [Gza の軍が来襲した Sejм 河の流域], また Jaroslav については, Ярослав в Чернигове, совокупив вой свои, стояшетъ と出ています。Slovo の作者が来援を呼びかけている公が、Suzdal' の Vsevolod (123) にせよ, Rjurik と Davyd (127) にせよ, Roman と Mstislav (133) にせよ, Ingvar' Vsevolod および Mstislav の 3 人の子ら (140) にせよ、すべて Vladimir Monomach の子孫であるのは注目すべきで、これは Ol'goviči がこのように《戦闘の準備を完了した》(dospъли на брань) 以上来援を呼びかける相手としては Monomachoviči しか残っていないからにはかなりませぬ。なお Lixačev, 94 は Ol'goviči を Igor' の一族と解し、dospъли на брань を они поспешили лишь к своему поражению と訳していますが、上の場合と同じく、これまたはなはだしい牽強附会の説と言わざるをえません。